



沼田元氣

JSNインタビューシリーズ4回目は「ヌマバ伯父さん」こと沼田元氣さんです。沼田さんは4年前、鎌倉は長谷に伝統こけしとマトリョーシカの専門店「コケーシカ」をオープンされました。マトリョーシカのルーツが日本のこけしにあることは比較的知られていますが、両者の融合が試みられたことは果たしてあったでしょうか？

セルギエフ・ポサド、マトリョーシカ工房見学ツアーからお戻りの沼田さんにお話をうかがうため、コケーシカ鎌倉にお邪魔しました。
(このインタビューは今年7月に行いました)

—沼田さんとロシアのそもそもの出会いは？
日本人ですけど、母がロシア生まれなんです。祖父がロシアと貿易をしてまして、向こうに住んでましたから、母は革命前のウラジオストクで生まれたんです。だからマトリョーシカは昭和の日本家屋の中のこけしの様に身近にありましたね。

—マトリョーシカ工房見学へ行くようになったきっかけは？

初めてロシアに行ったのが、80年代だったんですけど、時代の変化と共にロシアがおもしろくて。ちょうどペレストロイカ前頃ですね。ロシアでマトリョーシカの制作現場を見てきて。帰国後、「マトリョーシカの工場見学っていうのがあったらみんな行きたいだろうね」と話になり、最初は周りの人たちを集めて行ってたんですけど、それからJIC旅行センターさんと一緒にツアーを組むことになりました。

この間も25人くらいのお客さんと一緒に行ってきました。女性がほとんどでした。でも年代は10代から50代までばらばらです。だから若い人にロシアが人気ですっていうわけではないと思いますね。年齢とか職業とか境遇とかに関係なくて、好きな人が好きってことではないでしょうか。



工房見学の様子(写真提供: KOKE-SHKA)

3年前に書いたマトリョーシカの本で「マトリョーシカの魅力は女性の魅力ではないか」という説を書いたんですね。若くてやせる女性が美しいっていう欧米の価値観だけじゃなくて、ふくよかなロシアの可愛いおばあちゃんの魅力とか、マトリョーシカがロシアの美を表現したんじゃないかっていうことを書きましたら結構反響があったんですよ。

—なるほど、では「コケーシカ」はどのように誕生したのでしょうか？

以前、宮城県とニジエゴロド州が姉妹都市だと知りまして、何度か企画の提案を試みたんです。当時、県は車とかITの分野で経済交流しようとしていたそうで、なかなか話に乗ってもらえなかったんです。それがリーマンショックで様々な経済協力のプロジェクトが頓挫してしまっただけで、その時ちょうど県の人に、「こけしとマトリョーシカはとても近い存在なんですよ」という話をしたら、じゃあそれをやろう、でも何から始めたらいいのかと相談されまして、こけし職人さんがマトリョーシカの木地に絵付けする「コケーシカ」というものを作って展示会をやったんです。

こけしっていうのは東北6県で十一系統ありまして、それぞれスタイルが違うんです。最初は日本のこけし職人さんも頑なで、こんなものは伝統じゃないってそっぽむいてたんですよ。でも、ロシアにもマトリョーシカを作っている伝統が百年あって、しかもそれは日本から持たれたもので、道具やなんかもすごく似てるっていうことを説明して、だんだん理解してくれるようになりました。

でもね、こういうヘンテコな思いつきが歴史を変えんじゃないかってことを信じてるんですよ。というのも、マトリョーシカのルーツも、



箱根の七福神細工 (KOKE-SHKA店内)

箱根の七福神やダルマの入れ子細工を、箱根の塔ノ沢にあった、ロシア正教の避暑館に来た神父が持ち帰った、という説が有力だと思えます。そもそもまだ百年しか経っていませんからね。

しかし、このおじいさん(七福神)がなぜ農民の少女になったのかというところがわからないんです。そこが不思議で面白いんです。

ある日ロシアの画家マルーチンと、ズビョズドチキンというろくろ師が思いついて、最初の木の入れ子人形を面白いと思って作って、そうやってマトリョーシカの歴史が始まったわけで、僕も、「コケーシカ」っていうヘンテコなものを作って、日本とロシアの友好の象徴になればとても嬉しいと思っています。

「コケーシカ」は日本で商標も取ったんですけど、その後、逆を作ったんです。マトリョーシカの職人さんが、こけしの木地をキャンパスに絵付けする「マトコケシ」です。

2008年に最初の「コケーシカ」の展覧会をやった、その後で「マトコケシ」展をやろうとなつて、しばらくして震災が起き、チェルノブイリのこともあったのでロシアの人の何かでできることはないかという友好も手伝って実現したんです。

いろいろなご苦労もあったかと思われませんが。

そうですね、ロシアの人との仕事はいつもゆっくりなので、送ってくれるって言って待ってても、なかなか来ないから、結局ロシアまで取りに行ったり、送ったものが半分しか届かないとか、全然違うものができちゃったり、いろいろありますけど、うんざりはしません。うんざりしたら終わっちゃいますからね。でも、直接頼みに行ったり、引き取りに行ったりするのはやっぱり楽しいですよ。旅費はかかりますけど(笑)。

あとは知的財産権のことで言うと、うちの商品をロシアの本でもたくさん紹介してくれたりするんですけど、◎を入れてくれないんですよ。うちはこういう小さな冊子でもロシア語で入れるようにして、間違っていないか心配にもなるけど、やっぱり名前が入ってたら嬉しいじゃないですか。でも向こうは、大学の研究者や博物館の人でさえ、「どうして入れなきゃいけないの?」っていう。だから、僕らがこうなんだよっていうのは、おこがましいので、ウォッカでも酌み交わして気心が知れたところで初めて、「こういう時は著作物の◎入れてよ。お互い宣伝にもなるしさ」ってやるべきなのかも考えたりします。



KOKE-SHKA店内の棚より

前が入ってたら嬉しいじゃないですか。でも向こうは、大学の研究者や博物館の人でさえ、「どうして入れなきゃいけないの?」っていう。だから、僕らがこうなんだよっていうのは、おこがましいので、ウォッカでも酌み交わして気心が知れたところで初めて、「こういう時は著作物の◎入れてよ。お互い宣伝にもなるしさ」ってやるべきなのかも考えたりします。

—そういう幾多の困難を乗り越えて。

そうですね、これはもう一世代ぐらいかかるかも(笑)。でもね、これはとっても難しい問題でね、ある人に批判されたんですよ。僕がロシア人にこういうデザインで作ってくれて依頼して、正確にそれを作らせる。それじゃあ世界の工場・中国と一緒にやらないかと。ロシア人はロシア人なりの感性を持ってそれをアレンジして作ってくるんだから、それがロシアに発注するいいところじゃないかって。

—ロシアでも若い世代の感覚は急速に変化しつつあるように思いますが、日本文化に興味を持つ人は増えていきますか?

そうなんですけど、マトリョーシカの研究をしているとか、商売で扱っている人たちっていうのは、どうしてもその世代にまだ届かないんですよ。日本を好きな人と、ロシアを好きな人同志がくっつくのが一番いいんだけど、僕らはまだまだ少数派で、しかもちょっと片思い的なところがあるんですよ(笑)。

でも、日本もロシアも状況はよく似てると思うんですよ。ロシア人にとってマトリョーシカはあくまでお土産品で、まあ、あることが当たり前。興味はない。それはこけしも一緒で、日本人にとっては茶筆筒の上にホコリかぶって、どこの中にもあったもの、でも買おうとは思わない。だけど、ディスプレイジャパンというか、ちょっとず

つ自国の文化伝統に興味を持つ若い人が増えてるとか、再発見されてることを思うと、ロシアも同じところに立ってるなと思いますね。

—ロシアでも少しずつ若い人がマトリョーシカに興味を持ち始めているのでしょうか。

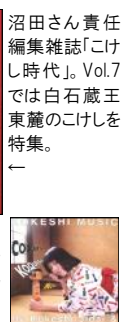
そうだと思います。ロシアのガイドが、僕と一緒にいろいろ工房をまわったりして、だんだんマトリョーシカがわかるようになってきたって云うんですね。なぜ今まで興味があなかったかっていうと、雑多に大量生産で作られたものしか見てなくて、露店で売ってる大統領のマトリョーシカを家に置こうとは思わない。でも、工房に行ったら産地風土の中でいいものを見たらほしくなっちゃったって云うんです。

ロシアでもマトリョーシカの専門書が出始めたんですよ。ロシア人が書いたロシア語のマトリョーシカの本。それがまた日本語に訳されて、つい最近日本でも発売されたんです。ちょっとずつ文化再燃的な兆しがあるんですよ。

(2013.7.19)



KOKE-SHKA



任 貴 田 沼
編 集 田 沼
集 集 田 沼
時 代 田 沼
」. Vol.7 蔵 王
で は 白 石 蔵 王
東 麗 の こけし
東 麗 集 集
特 集 集
一



特別付録
→
こけしミュージック
CDとこけしピンナップ
ブガールポスター。

沼田元氣(ぬまたげんき)
東京生まれ/ポエムグラフィア
(写真家詩人)。80年代芸術家
宣言後渡米、A.ウオーホールに
師事。「憩」をテーマに著述活動
を行う。主な著書に『ほくの伯父
さんの東京案内』(求竜堂)、『ポ
ムグラフィア』(雲の上の散歩)『フ
ルースインターアクションズ』、
『水玉の幻想』(青山出版社)、
『喫茶遺産』(平凡社)、『京都
編』(白夜書房)ほか多数。
池袋コミュニティ・カレッジで
「乙女の美学」講座開講中。
2008年、東京国際フォーラム
にてコケーシカマトコケシ展覧
会を開催。翌年、鎌倉・長谷に
「KOKESHICA」をオープン。20
12年に仙台・カメイ美術館で
「マトリョーシカ博覧会」を開催。
震災後、東北を応援するコケシ
マガジン「こけし時代」を定期刊
行中。